

埋文にいがた

MAIBUN

新潟県埋蔵文化財センター

MAIBUN
NIIGATA

2018 Dec.

第105号

調査
発掘
遺跡
整理
紹介

南魚沼市 六日町藤塚遺跡Ⅱ ・ 阿賀野市 土橋北遺跡





平成30年度
発掘調査
遺跡の紹介

六日町藤塚遺跡 II —古墳時代後期のムラ—

所在地：南魚沼市余川地内

六日町藤塚遺跡は魚野川の左岸、庄之又川の扇状地の標高178mに位置します。国道17号六日町バイパスの建設に伴って、平成29年度から調査しています。

遺跡全体を土石流堆積土が覆ったことで、当時の生活の痕跡を良好な状態で検出しました。その一つが周堤帯を伴う堅穴建物です。周堤帯とは掘った土を周囲に積み上げて堤状にしたもので、雨水が建物内に入るのを防いだと思われます。多くの場合は、長年の風雨や耕作などで残りません。周堤帯は幅2.3m～3.2m、高さ28cm～16cmです。堅穴建物の床面の規模は、南北6.7m、東西6.2mのほぼ正方形で、支柱穴は4基を確認しました。炉は床面中央の西寄り、炉からは動物の焼骨片が出土しました。この建物のほかに平地式建物もみつき、古墳時代のムラであることがわかりました。

長軸1.9m、短軸1.2mの範囲に127個の石を集めて、部分的に3段に積み上げた集石遺構もありま

した。これは古墳時代としては大変貴重な事例です。石は焼けておらず、その下からは遺構・遺物はありませんでした。その用途は不明ですが、石の形態は長い楕円形が中心で、意図的に選んで集めてきたと感じられます。このなかには、たたいた痕跡や線状の刻みがある石もあります。

遺物は須恵器の甕やハソウ、土師器の高杯・壺・椀・甕など、砥石、鉄製品、土製丸玉、滑石製の勾玉や白玉が出土しています。足の踏み場に困るほどに遺物が多く出土する範囲もありました。また、ほぼ完形の須恵器や土師器が、マツリの道具である石製模造品や白玉と共にまとまって出土した遺構もありました（表紙写真）。

直径3mm～4mmの白玉といった微細な遺物は、現地で土を採取し、水で洗いながら篩って発見します。それによって、土師器や須恵器の破片が密集する地点以外でも土製丸玉や白玉が出土することがわかりました。この作業では炭化した種実などもみつけています。（加藤元康）



周堤が残る堅穴建物



土師器の破片が密集して出土する様子



集石遺構



微細な遺物を採取するための水洗選別作業



30年度
整理作業
から

土橋北遺跡

—川岸から土器が出土した縄文時代晩期の遺跡—

所在地：阿賀野市百津字ヤチ313-1ほか

土橋北遺跡は、越後平野の東縁、阿賀野川右岸に位置し、現標高は約7mです。旧水原町市街地の南側で現況は水田でした。県営湛水防除事業による排水路3路線（安野川・大荒川・小里川）の改修に伴って平成29年度に発掘調査を行いました。遺跡は2時期に別れ、上層が縄文時代晩期、下層が縄文時代中期から後期でした。発掘調査面積は、上層が2,010㎡、下層が3,223㎡で合計5,233㎡となります。上層では、土器が集中している地点や土坑、川跡などが見つかりました。土器の集中している地点は19か所確認しましたが、完全に復元できた土器はほとんどありません。炭や焼土が広範囲で確認できた地点もあります。この炭の中からは、土器片と共にたくさんのクルミやトチノキなどの食用種実（木の実）の焼けた破片が出土していることから、ここで火を用いて食料加工を行っていたと考えられます。また、遺跡の中を幅

約4m、深さ約1mの蛇行する川が流れています。この川の中からも多くの土器や石器が出土しました。またトチノキ、クルミ等の木の実も多くあります。土器の時期は晩期後半で、煮炊きに利用した甕や深鉢がほとんどで、土器の内側には炭化物が付いています。石器は、石鏃、石錐、磨製石斧、磨石類、石皿などがありますが少量です。

今回調査したところは遺跡の一部と考えられ、調査範囲外に建物を含む集落があるものと予想されます。

下層では土器の集中している地点や土坑が見つかりましたが、建物跡は確認できませんでした。出土した遺物は中期後半から後期前葉にかけての土器と石器ですが、出土量は多くありません。この地域では、標高の低い平野部に立地する遺跡から縄文時代中期後半の遺物が見つかることは、珍しいことです。（高橋 保）



写真1 調査区全景（西から）



写真3 上層 写真5の土器出土状況（西から）



写真2 多くの遺物が出土した川跡（南から）



写真4 後期の土器
高さ約36cm



写真5 晩期の土器
高さ約47cm



埋文
コラム

吉ヶ沢遺跡B地点出土の 旧石器時代石器接合資料

阿賀野川は福島・栃木県境の荒海山^{あらかいさん}を源流とし、新潟市で日本海に注ぐ全長210kmの一級河川です。吉ヶ沢遺跡は、阿賀野川が新潟平野に注ぐ手前左岸の河岸段丘上にある約2万3千年前の遺跡です。磐越自動車道建設に伴い平成3・5・6年に発掘調査が行われ、現在は阿賀野川サービスエリア下り線となっています。

ここでご紹介するのは、旧石器時代の石器接合資料です。旧石器時代とは、約4万年前から1万5千年前に相当し、今よりも気温が数度低い氷河期^{ひょうが}で、人々は主に狩りによって食料を得ていました。シカなどの移動する獲物を追って、1年の間に住まいを転々と移す生活をおくっていました。

旧石器時代の石器は、石を打ち割って作る打製石器が主なので、遺跡からたくさんの石器や石のかけら（剥片^{はくぺん}）、割りとられた残りの芯の部分（石核^{せきかく}）が出土した場合、それらがくっつくことがあります。これが接合資料^{せつごう}で、剥片や石核のくっつき方を検討することで、当時の石器の作り方を知ることができる貴重な資料です。

写真1左の接合資料では、たくさんの縦に細長い剥片が石核に接合しています。日本列島の旧石器時代では、約3万年前ごろから縦に長い剥片を連続して打ち割る技術が流行しました。この縦に長い剥片を石刃^{せきじん}、石刃を連続的に打ち割る作り方を石刃技術と呼びます。石刃技術はこのころ世界中で流行した技術で、吉ヶ沢遺跡B地点でも盛んにこの作り方で石刃が打ち割られ、さらにその石刃を加工して形を整え、主に槍先^{やりさき}として使用されたナイフ形石器、動物の皮をなめしたり、木を加工したりする彫刻刀形石器などの道具が作られました。また、鋭い刃を持った石刃はそのまま狩りの獲物の解体などに使われました。

接合資料からは、石器の作り方以外の情報も得られます。発掘調査では石器や剥片の出土地点を記録しますが、接合資料の各石器の出土地点を検討して、遺跡内のどこで石器を作ったり、使ったりしたかなどを推定します。また、写真2の接合

資料には下半分に大きなすき間があります。これは、打ち割られた石器が遺跡から持ち出されたため、住まいを転々と移す生活の証拠です。

石器の材料は、遺跡から約7km離れた場所とれる頁岩^{けつがん}という岩石で、吉ヶ沢遺跡を訪れた人々は、この地で石材を獲得し、石器を大量に作って補給していたようです。（沢田 敦）



写真1 左：石刃技術の接合資料
右上：ナイフ形石器
右下：彫刻刀形石器



写真2 下半分にすき間のある接合資料
展開写真



埋文
インフォ
メーション

第23回遺跡発掘調査報告会

発掘！新潟の遺跡2018展 を開催します

第23回遺跡発掘調査報告会・シンポジウム 「白河荘の考古学」

平成29・30年度に発掘調査を行った遺跡の最新成果について、発掘担当者が画像を交えて解説します。また、当センターが行った阿賀野バイパスの発掘調査の成果に焦点を当てたシンポジウム「白河荘の考古学」を開催します。東北地方の中世考古学に詳しい飯村均氏（（公財）福島県文化振興財団）と中世文書を研究されている前嶋敏氏（新潟県立歴史博物館）を招き、中世阿賀野の開発等について検討します。

- ◆ 日 時：平成31年 3月10日(日) 10:30～16:00
(受付開始は10:00)
- ◆ 会 場：新潟県立生涯学習推進センター
ホール
(新潟市中央区女池南3丁目1-2)
- ◆ 内 容：【発掘調査報告】10:30～12:00
村上市上野遺跡 (縄文時代後期)
南魚沼市六日町藤塚遺跡 (古墳時代)
柏崎市丘江遺跡Ⅵ (弥生時代・中世)
柏崎市丘江遺跡Ⅶ (中世)
【シンポジウム】13:00～16:00
阿賀野バイパスの調査成果
中世奥羽の道とマチ
古文書からみた白河庄
パネルディスカッション

- ◆ 参加費：無料
- ◆ 定 員：175名
(申込不要・当日定員になり次第締切)

※手話通訳、要約筆記を行います。



丘江遺跡Ⅶ (鎌倉～室町時代の村)

発掘！新潟の遺跡2018展

第23回遺跡発掘調査報告会に併設して開催します。遺跡発掘調査報告会で報告する4遺跡の最新の調査成果について、出土品とパネルで紹介します。展示品の多くが初公開となりますので、お見逃しのないよう、ぜひお越しください。

- ◆ 日 時：平成31年 3月5日(火)～3月17日(日)
9:30～19:00 土日は17:00まで
- ◆ 会 場：新潟県立図書館
エントランスホール
(新潟市中央区女池南3丁目1-2)
- ◆ 内 容：上野遺跡・六日町藤塚遺跡・丘江遺跡・阿賀野バイパス関連遺跡の出土品とパネルを展示
- ◆ 観 覧：無料



上野遺跡の縄文土器・石器



六日町藤塚遺跡 (古墳時代の土器出土状況)



県内の
遺跡・遺物
103

佐渡貝塚群（堂の貝塚・藤塚貝塚・三宮貝塚）出土品125点

（平成28年3月25日 新潟県指定有形文化財（考古資料））

遺跡所在地：佐渡市貝塚・真野新町・吉岡・三宮

遺物保管：佐渡市（佐渡市立佐渡博物館・佐渡市埋蔵文化財整理事務所）

縄文時代の堂の貝塚・藤塚貝塚・三宮貝塚は、佐渡島中央に位置する国中平野から西側の真野湾沿岸にかけての段丘上・砂丘上に立地します。

堂の貝塚は佐渡市貝塚に所在します。地元で貝の散布が古くから認識され、そのため江戸時代には村名の起源にもなり、「貝塚の貝塚」とも呼称されていた遺跡です。貝塚の規模は東西35m、南北20m以上と推定され、昭和44年のほ場整備事業に伴う発掘調査では、サドシジミを主体とする貝を含む土層から、縄文時代中期前葉～中葉の土器、石器、骨角器、土壙墓群に埋葬された人骨、立石遺構などが見つかりました。なかでも第6号人骨（写真1）の頭部付近には、鉄石英と蛋白石製の精巧なつくりの赤色と白色の石鏃が13本置かれ、胸部には生息域が温帯・熱帯海域に分布するイタチザメの歯を加工した装飾品（垂飾）が1点副葬されていたことが特筆されます（写真2）。

藤塚貝塚は、昭和41年、採砂工事中に貝層の露頭が確認されたため緊急調査が行われ、翌42年には保存目的の調査が実施されました。調査の結果、東西30m、南北20m以上の規模と推定され、サド

シジミを主体とする貝を含む土層からは縄文時代中期後葉～後期前葉の土器、石器、石製品、骨角器、貝製品などの遺物、人骨が埋葬された土壙墓や配石遺構が見つかりました。

三宮貝塚は三宮神社境内にあります。貝塚の規模は東西90m、南北70m以上と推定され、島内最大の貝塚で、残りが最もよく、現在でも貝などの散布が見られます。昭和36年に本格的な発掘調査が行われ、調査の結果、サドシジミを主体とする貝を含む土層から、縄文時代後期前葉～晩期後葉の土器、石器、石製品、骨角器、貝製品などの遺物、人骨が埋葬された土壙墓が見つかりました。なかでも骨角製の刺突具や装飾性の高い装身具は注目されます。

堂の貝塚は中期、藤塚貝塚は中期～後期、三宮貝塚は後期～晩期と3貝塚は縄文時代中期から晩期にかけて形成時期がほぼ連続し、佐渡島における縄文文化の変遷を知る上でも重要です。また、新潟県内では類例の乏しい骨角器や貝製品がまとめて出土しており、当時の道具の変遷や食料獲得状況も把握でき、学術的に貴重なものであることから、出土品125点が新潟県有形文化財に指定されました。（佐渡市世界遺産推進課 鹿取 渉）



写真1 堂の貝塚 第6号人骨



写真2 堂の貝塚 石鏃と垂飾

